

オセアニアの櫛くし

右の櫛(展示番号OS0318、長さ/24cm)

左の櫛(展示番号OS0316、長さ/63cm)

## 小林 繁樹(こばやし しげき)

本館文化資源研究センター

右の短めの櫛は、ミクロネシア地域ヤップ島で使われていた縦櫛である。竹を細かくさいた歯が二二本、二色の細い蔓つるで丹念に巻かれ、洗練された文様を描きながら固定されている。多少、きゃしゃな印象を受けるけれど、美しい櫛である。

ヤップ島では櫛は、少なくとも公共の場において男性だけが使うものであった。しかも厳格な身分制度にともなって、使う櫛のかたちが異なっていた。このロアイニ・ヤップ(編んだ櫛の意)とよばれるかたちの櫛は、ことに青年が日常の暮らしのなかで櫛の結合部分をななめにねじって挿したという。小粋な装いを演出するアイテムとなっていた。

左の大振りの櫛は、やはりミクロネシア地域のチューク(トラック)諸島で使われていた舞踏用の縦櫛である。マングローブと思わ

れる堅木かたきからセンスよく八本の歯を削りだしている。把手とては黒色の植物繊維に白色のビ



ーズをとおして文様を作り、大きく伸びる五本のグンカンドリの羽やウミツバメのうぶ

毛、紅いウミギクガイの円盤を留めたビーズの束などが、大胆で派手な飾りとなっている。チイとかツーとよばれるこの櫛も男性用で、チュークの櫛はその見事さでミクロネシアのなかでも際立っている。

こうした美や富、社会的な地位などを表象する飾り櫛は、かつてはミクロネシアのみならずオセアニア各地で使用されていた。そしてそれはむしろ男性用が多い。しかし二〇世紀始めごろからの近代化西欧化の影響で、男性は長髪だったのを短髪にしだし、飾り櫛は使われないようになってきた。今、男女ともよく使うのは、プラスチック製などの実用櫛である。

伝統的なオセアニア文化を彩るこれらの櫛は、一九七七年の開館以来三〇年間、本館展示場で展示され続け、今も来館者の目を引きつけてやまない。